

# 高校中退経験にみる社会的包摂／排除

——中退者インタビュー調査から——

○一橋大学 飯島 裕子  
○一橋大学 濱沖 敢太郎  
○一橋大学 山田 哲也

## 1 目的

本報告の目的は、高校中退経験者へのインタビュー調査データを用いて中退に至る背景とその後の生活史を分析し、学校を機軸にした社会的包摂の可能性と限界を検討することである。

## 2 研究の背景

格差・貧困問題が社会問題化するなかで、高校中退現象が着目を集めている。そもそも日本における高校中退率はいわゆる先進諸国のなかでも低水準を維持しており、近年はさらに低下傾向にある（2011年度の中退率は約1.5%）。しかしながら、定時制・通信制課程など特定の校種の学校では中退者が集中し、なかには卒業までに半数近くの生徒が退学する学校も存在する。これらの学校に通う生徒の多くは社会経済上の地位が相対的に低く、学校教育がかれらをうまく包摂することができず貧困の世代間継承が生じることが懸念されている。

今日において事実上義務教育化している高校を中退すると、安定した雇用を得ることが困難になるなど、リスクに満ちたライフコースを強いられてしまう。高校中退者に対する社会的関心が高まる背景には、格差・貧困問題が深刻化するなかで学校教育を通じた社会的包摂に揺らぎが生じ、学校を機軸にした従来型のセーフティーネットが機能不全を来す状況がある。

## 3 方法

そこで、今回の報告では高校中退経験者約50名を対象にしたインタビュー調査で得られた生活史を素材に、かれらが中退に至った背景とその後のライフコースを検討し、学校を機軸とした社会的包摂の可能性と限界の考察を試みた。

分析の観点は、以下に示す通りである。

- ・家庭的背景（保護者の学歴・社会階層）が中退経験にどのような影響を与えるのか
- ・中退の「動機」に関する語りの特質（中退をめぐる従来の議論との異同の検討）
- ・学外支援機関（ハローワーク、サポートステーション、フリースクールなど）の利用状況
- ・進路未定の「空白」期間の意味と模索期に利用された社会的資源の特質
- ・1990年代以降の高等学校多様化政策が中退とその後の経験に与える影響

## 4 結果と結論

分析の結果、次のようなことが明らかになった。①中退経験者の多くは家庭環境に様々な困難（離死別によるひとり親家庭の割合の高さなど）を抱えていた。②中退の動機には、従来の議論が強調する「学校不適應」と、そこに限定されない現代的な特徴（決定的な事由がなく「なんとなく」中退するなど）が見出された。③学校外の支援機関を利用したと語る者はごく少数に留まっており、その背景には公的な機関に対する関心の薄さと、その裏返しとしての「地元つながり」などのインフォーマルなネットワークの積極的な利用があった。④「空白」期間には、展望を失うことによる「立ちすくみ」、③で述べたネットワークから得られる資源を積極的に活用することによる「仕切り直し」という肯定／否定の両面があった。⑤多様化路線のもとで設置された新しいタイプの高校を肯定的に捉える中退者と必ずしもそうではない者がおり、多様化路線の意図せざる帰結が見出された。\*本研究はJSPS 科研費 15285226 の助成を受けたものです。